

令和2年度「宇治市男女共同参画計画（第5次UJI あさぎりプラン）」 策定にかかる市民意見聴取座談会 まとめ

【実施の概要】

1. 目的

男女共同参画計画の策定において重要なテーマについての専門家、当事者等が日頃感じていることや課題の有無、解決の方向性などの意見を聴取して、計画の内容に反映する。

2. テーマと調査課題

（1）アンコンシャスバイアス（性別にもとづく無意識の偏見）

①計画策定上の課題

- ・男女共同参画社会の実現には、子どもの頃からの男女平等意識、男女共同参画が必要である
- ・隠れたカリキュラム、性別にもとづく無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）が、子どもの意識形成に影響する
- ・性被害、女性に対する暴力の背景には、ジェンダー意識がある

②調査項目

- ・男女平等にかかわる子どもの意識・行動
- ・自尊感情の醸成、性被害予防の取組内容
- ・保護者における男女平等・男女共同参画にかかわる意識・行動

（2）女性の活躍推進・エンパワメント支援

①計画策定上の課題

- ・社会の持続的成長とジェンダー平等のためにあらゆる分野における女性の活躍推進が求められている
- ・継続就労を希望する女性は増加しているが、両立支援の環境が十分とはいえない
- ・女性が仕事上の能力開発、経験の蓄積を行う機会が男性に比べて少ない
- ・女性経営者、女性管理職の割合が低い

②調査項目

- ・相談者の状況、相談の主な内容
- ・相談支援の内容
- ・チャレンジ相談者に対する支援の方向性
- ・女性の就労継続における障壁（女性自身の意識・家庭環境・職場環境・家族関係等）
- ・女性の職業的スキルアップ
- ・女性経営者や管理職が増えるために必要なこと

（3）困難を抱える女性への支援

①計画策定上の課題

- ・DVに関する一般的な認知は広まっているが、支援を必要とする人への支援が十分とはいえない
- ・DVと児童虐待の関わりが大きい

- ・ 女性ひとり親家庭の生活困窮など女性の貧困問題

②調査項目

- ・ 地域におけるDV被害者等の困難を抱える女性のおかれた状況
- ・ DV被害者等への相談支援などの対応における課題
- ・ DV被害者、ひとり親家庭の自立支援における課題
- ・ DV防止啓発の方向性

(4) 地域防災における男女共同参画

①計画策定上の課題

- ・ 地域の活動は男性とともに多くの女性が支えているが、活動方針・意思決定の場への女性の参画率が低い
- ・ 地域防災活動における男女共同参画の視点が求められている

②調査項目

- ・ 防災・災害時対策に関する住民意識
- ・ 防災・災害時対策の取組状況

(5) 男性のワーク・ライフ・バランス（子育てへの参画を中心に）

①計画策定上の課題

- ・ 男性の育児参加は、親子ともによい影響をもたらすと認識は広まっているが、職場環境が整っていないなど男性が育児・家事に十分に参画できていない

②調査項目

- ・ 家庭における育児・家事に対する意識
- ・ 平日・休日に行う育児・家事の行動
- ・ 職場における両立支援制度の有無と活用状況

3. 実施日時と参加者

	テーマ	参加者
1	性別にもとづく無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス)	・ 小・中学教諭（指導主事等） 男 女
2	女性の活躍推進・エンパワメント 支援	・ NPO法人関係者 女 ・ NPO法人関係者（学校法人元理事） 女 ・ 宇治商工会議所関係者（女性会） 女
3	困難を抱える女性への支援	・ DV被害者支援民間団体 女 ・ 男女共同参画課相談コーディネーター 女 ・ 市生活支援課 男
4	地域防災における男女共同参画	・ 自主防災組織代表者（地元町内会役員） 男 ・ 宇治市消防団あさぎり分団関係者 女
5	男性のワーク・ライフ・バランス (子育てへの参画を中心に)	・ 保育園関係者 男 ・ 子育て中の男性 男 ・ 市こども福祉課 男

【実施の結果】

1. アンコンシャスバイアス（性別にもとづく無意識の偏見）

（1）教員自身の「性別にもとづく思い込み」（アンコンシャスバイアス）について

- トラックやバスの運転手、配達員は男性と無意識に思っている。最近は女性の運転手や配達員を見かけることがあり、自分の思い込みに気づく機会もある。
- 応援団長には（女子がなってもよいが）男子が立候補して当たり前という思い込みがあった。女子の団長に対して、子ども自身には偏見はないように思う。
- 座席表を書くときに男子は青か黒、女子は赤かピンクで書くなど、男女を色で分けることが多い。
- 児童に対して無意識で「男なんだから我慢しなさい」と言ってしまったことがある。
- 学習に必要な教材、教具を児童と運ぶ場面で、教員が教材、教具を児童に渡す際、（配慮のつもりで）男子は多めに、女子は少なめにしていることがある。
- 家庭科の裁縫は女子が好きだが、男子は興味がないだろうと思っていた。実際にやらせてみると、男子が一生懸命、ていねいにするのを見て、自分の思い込みに気づいた。
- 教師が「〇〇は男なのに裁縫が好き」と言うのを聞いたことがある。別の教師が「その発言は良くない」と指摘していた。
- 家庭科は男子よりも女子の方が得意で、技術では男子の方がトンカチ打つのが上手と思っている。しかし、実際は男女ではなく、性格や個人の興味関心によると思う場面がある。
- 掃除や片づけは女子の方が丁寧で、男子は雑というイメージがあり、女子の机の中が片づいていないと「女子なのに」と思うが、男子なら「男だから仕方ない」と思う。

（2）子ども同士の「性別にもとづく思い込み」（アンコンシャスバイアス）について

- 男子は、女子に負けたらプライドが傷つくと思う。男子は女子より強い（強くないといけな）という偏見を持つ児童は「〇〇くん女子に負けた」とからかうと思う。
- 部活では、吹奏楽は圧倒的に女子が多く、野球、サッカーは圧倒的に男子が多い。科学部、将棋部も男子が多い。文化系の部活は女子が多い。本当は入りたいが、周囲の偏見を気にして入らない子どももいるのでは。
- 子ども同士で、「男のくせに吹奏楽」、「女のくせにサッカー部」とか、足の早い女子に向かって「女やのに」など言うのを聞いたことがある。
- 子ども同士で、「男のくせに」「女のくせに」といった発言が出るクラスとそうでないクラスに分かれるかもしれない。クラスの雰囲気は教師の人権感覚を反映している事が多いように感じる。教師がきちんと指導しているか、ひとりひとりを認めているかを子どもは感じ取る。
- 女子に対して男子と同じだけ物を運ばせようとする「女子なのに」と言う子どもがいる。
- 自分の趣味、習い事をあえて知らせない（知られたくない）子どもや家庭があった。男子で裁縫が得意、女子で柔道が得意とかを知られると、みんなに「男やのに」「女や

のに」と言われたりするのがいやで敢えて口に出さない子どもがいると思う。

(3) 保護者の「性別にもとづく思い込み」(アンコンシャスバイアス)について

- 教師の性別によって保護者の言葉遣いが変わったり、男性教師の方が厳しく指導するなど教師の指導内容が異なると思っている保護者もいる。
- 高学年になると、「いつまでも女の子と遊んでいる」と心配する男子の保護者がいる。

(4) 「隠れたカリキュラム」について

- 教師が、忘れ物をした児童の名前を黒板に書くことは、教師は意図していなくても、他の子どもから見ると「いつも忘れ物をするダメな子」というレッテルを貼られる可能性があるとしてされている。
- 担任の先生の言葉を、子どもが生き写しのように真似ているのに気づくことがある。
- 教師が手本なので、板書を教師が適当に書いていけば、子どものノートが乱雑になる。

(5) 「学校現場での男女平等」について

- 運動会の徒競走で、タイム順に走るグループ分けをするが、男子、女子で分けている。今思えば、同じタイムなら男女混合でいいのかもしれない。
- 職場でも、物を運んだりするのは、男性の先生に頼むことが多い。小さい子どもがいる女性の先生は夜は出られないけど、男性教師は遅くまで残っても大丈夫みたいな意識が以前はあった。今は男性教師が「子どもがいるので」など早く帰ることができる。
- 男性教師は育休がとりにくい。とるのは圧倒的に女性が多い。

(以前と比べて変わっていること)

- 以前は、名簿順が男女で分かれていたが、今は男女混合名簿になっている。
- 以前は、通学時の帽子の形が男女で異なっていたが、今は好きな形を選べるようになってきている。
- 授業では、以前のように男女別に行うものはない。(体育を除く)
- 部活動では、以前は野球部、サッカー部は男子のみだったが、今は女子も入部できるし、試合にも出られる。
- 以前は、ランドセルで女子が赤、男子が黒が主流だったが、今はランリュックでほぼ統一されている。色も黄色がある。
- 体操服のゼッケンが以前は、女子は赤、男子は黒だった。(中学校)

(6) 「性の多様性」について

- 教員対象の人権教育に関する研修や学校独自の研修で、「性的指向」がテーマに取り上げられるようになってきている。
- 中学校では、最近、女子でズボンの制服を選ぶ生徒がいるので、そういう子がいる学校は、教師の研修会を行っている。
- 性にとらわれずに、「みんな違っていい」が根底にあれば、難しく考えなくてもよいと思う。

- 「自分らしさがいいんだよ」は小学校で教えていかななくてはいけない。性の問題は中学生くらいで悩むので、前提として、みんなそれぞれを尊重するという意識があれば良いのではないか。
- 中学校の制服は女子はスカートが主流だが、自分は身体的には女性だけど、心は男性で、実はズボンをはきたいというのが10年前くらいから顕在化している。どちらにするかは選べるようになってきているが、実はズボンをはきたいと言い出せない生徒がいるのではないかと思う。小学校では女子もズボンをはき、違和感ない。

2. 女性の活躍推進・エンパワメント支援

(1) 「宇治市における女性の活躍」について

- 宇治市は公民館活動が活発で、地域で活躍している女性が多い。高齢者の配食で400食を作るグループもあり、誰でも簡単にできることではない。レベルが高い活動をしている。学区福祉委員会や高齢者サロンも活発だが、女性の長は少ない実態もある。
- 自分が仕事を辞めて地域の活動に専念するようになって感じたのは、働いている女性は地域の活動に参加する時間がないということ。
- 最近、若くてもNPOで働きたいという女性がでてきた。「ゆめりあ」に男女共同参画課があって、そこから活躍する女性が出てきた。仕組み作りが大切だと感じる。
- 同世代の友達、親の介護で仕事を辞めている人が多い。優秀な人ばかりなので、仕事を辞めても何かしようと思っている人が多い。

(2) 「女性のエンパワメント支援」について

- 宇治国際交流クラブのメンバーは、ほとんどが主婦で50代以上の年代。クラブには何かが上手な人が来るわけではない。クラブに入ったことで、できなかったことができるようにならないと、クラブの意味がないと思っている。クラブができて30年たつが、当初の30人から今は100人を超える。英会話学習、文化交流、日本語教室、パソコン、ガイドクラスなど活動ごとにグループを増やしていった。毎年、国際親善協会でボランティア養成講座の人材育成をして新しいメンバーを増やす努力をしている。
- 会社が決めた就業時間などのルールで仕事ができる人と、できない人がいる。できないと、「勤め続けられなかった」というコンプレックスになる。NPOで雇用している人は、フルタイムの正社員だけが働き方ではないと考えて、週に2時間から正社員までいる。対価をもらうのは、人から認められた外部評価につながる。やりたいことを少しずつしていく中で、自尊心を取り戻すことにつながる。
- 娘の世代は、働きながらキャリアアップする勉強をしている人が多い。終身雇用の時代ではないことを、若い人達は敏感に感じている。これからはいくつも仕事を持ってやっていく人たちが増えていくと思う。男性だけの給料で生活できる時代ではない。娘2人は共働きでないと生活できないと考えていて、男性に依存する女性が少なくなっている。
- 女性は働いていても、結婚や出産、夫の転勤などで状況が変わることがあるので、いつでもどこでも雇ってもらえるスキルを身につけておかないといけないと思う。パソコ

ンや電話対応の能力は必須。スキルがあれば、自分の希望が叶う。自分の環境を活かせるようにもっていくのもエンパワメント。自分の努力で若い人は2足も3足もわらじをはいて、結婚もすればいい。

- 未だに出産時に仕事を辞める女性は多い。女性は自分の持っている力が、介護、子育て、夫の存在、親の存在等で出せていない。エンパワメント支援をするなら、生き方と働き方をセットにしないと難しい。介護、子育て、仕事を全部女性にかかってくる問題として、連動させて、地域の中で人も知識も多少のお金も回していけるようにしたい。
- 「会社経営は男性」という思い込みがあったが、後継者として自分の子どもを見ると息子よりも娘の方が優秀だと気づいた。もっと早く気づいて、古い考え方を改めるべきだったと思う。
- 商工会議所の会員企業では、後継者はほとんど息子で、娘よりも息子への期待が大きいのが一般的である。そのため宇治市商工会議所の会員 2000 人のうち女性の社長は1%のみにとどまる。
- 女性の活躍を目的とする相談は、出口のある相談にする必要がある。「ココチャレ」に相談に来る人は、何かしたいと思っているが、ハローワークに出ている求人の働き方ではない、起業相談に行くほどは固まっていない、子育て中でお金がいるけどパートに行きたいわけではなくて、何か自分でできることはないかと模索している人たちである。彼女たちの出口につながるような交流や情報交換の場が必要である。

(3) 「雇用されて働く女性の活躍のために必要なこと」

- 女性が思ったことを率直に言うのを快く思わない男性の上司や同僚がいる。男性の意識も変わってほしいが、女性自身も組織のなかでの根回しなどを学ぶことも必要であると思う。
- 働き続けるときに、妊娠出産・子育てを避けて通れないが、職場の中で理解してもらえないことがあった。出産、子育て、介護の制度を整えるのは必要。
- 正社員とパートで同じ仕事をしていても、待遇の差が大きい。仕事の内容で適切に評価されるべきだと思う。
- 今は公的な介護サービスもあるので、それらを活用して、夫の親は夫が看るのが当然という意識が浸透するべきだと思う。
- 雇用も介護も子育ても、対個人だけではなく、地域丸ごとで支え合える地域の環境を作る必要がある。
- 女性の能力を引き出すためには、週40時間などの時間や会社にしばられない仕組みを考えることが必要だ。例えば、通勤時間が短縮できる駅近のサテライトオフィスで、オープンに情報交換しながら仕事ができるところがあるとよい。
- 女性がスキルアップ研修に行きたいと思っても「子どもいるから無理」と見なされて、参加させてもらえないことがある。女性がステップアップする機会を対等に与えられていない。
- 働くうえで同じ立場の女性同士が自分たちの置かれた状況を話せる場がない。モチベーションを高めて、地域のために何とかしようと話し合いをできる場が大事。

- 産休明けで辞める人が多いので、企業が職場復帰をサポートする仕組みと同時に、産休に入る前に地域の子育て支援等を活用できるように、企業と地域と子育て・介護をつなぐ両立支援の仕組みが必要だと思う。

(4) 「事業所における男女平等や女性の活躍」について

- こうあらねばならないという思い込みは、いろんな価値観に触れることで変わっていくと思う。一人では解決できないことでも、誰かと一緒に取り組むことで解決できるという経験や他者の意見を自分事として受け止めて自分の意見を発信するということが大事になる。
- 入社時は男女同じ賃金でも年齢があがると差が出てくる。女性も勉強して仕事の能力を養うことで認められる。
- 男性のなかに女性が一人では意見が通りにくい。管理職の女性が増えていかないと変わらない気がする。

(5) 「女性の経営者や管理職の状況」について

- 「出る杭は打たれる」だけの古い体質の組織では、変化する環境についていけない。女性が経営者、管理職になっていかないと変わっていかない。
- 自分の意見を言うことは、自分のためでもある。分かってくれる人も必ずいると思う。
- 同じ職場に女性がいて、次に続く女性たちが同じようにステップアップして行かないと、孤立無援になってしまう。しかし、上にあがりたくないと言う女性も多いのが現実である。
- 役職に就くと残業、休日出勤も増えた。それができる人ばかりではない。結果を出そうと思ったらそれなりに時間も必要だ。
- 男性と能力は変わらなくても、職場では、いつ何時でも男性と同じように働ける状態というのが求められ、それをしないと認めてもらえない。
- 女性の経営者は男っぽい人が多い。補佐役に徹している人は大人しい。年齢が高くなればなるほど、波風立てないようにしようとする傾向が強くなる。
- 自分の意見は大事だけど、バランス感覚が必要だと最近分かってきた。以前は女性だからと鎧をいっぱい着ていたと思う。もう少し、強く、しなやかに仕事ができたらまた違ったのかなと考える。
- 会社の利益を生み出しているのは女性という会社もある。経営者の夫が妻に感謝していれば、それだけでも女性の自信につながる。

(6) 組織の運営で心掛けていること

- 本人のスキルアップにつながれば、ボランティアでもやりがい生まれる。メンバーの活動に感謝をし、多少気になることがあっても、ほめることを重視する。チームの交流機会をつくることにも配慮した。ささいなことで感情的にこじれることがあるので、言葉のかけ方も大事である。
- 人との出会いやつながりを大切にしていきたいと思っている。今の課題を見ながら、5年先、10年先を見据えた視点を大事にしていきたい。

一つは、思い付きで事業をしないこと。やりたい人がいて、そこに賛同する人がいたら事業ができるように準備して立ち上げるのが自分の役目だと心得ている。

自分の思いだけでは何もできないので、人に「ありがとう」の言葉を伝えることを意識している。一番大事にしているのは、働いている人や活動している人が困ったときには必ず助け合うこと。その人が急に休んでもカバーできるような配置を常に意識している。

3. 困難を抱える女性への支援

(1) 「日頃受けている相談」について

- 20年前に相談を始めたころと比べて、今は、暴力の連鎖が背景にあるケースが多くなっていて、そのために問題が複雑化している傾向である。
※暴力の連鎖＝被害者または加害者がDV家庭で育った人。その両方ともその子どもも影響を受けている。そのために精神的に病んでいる人も多い。
- 以前は夫婦関係の相談が8割位を占めていたのが、その件数が減ってきている一方で、中年で無職の息子と同居して経済的に支えている母親や、親と同居していた独身女性が親が亡くなると生活が立ち行かないなど、中年男性のひきこもり問題、シングル女性の貧困問題が相談で増えている。
- 仕事に就いていても非正規で経済的な自立が難しく、経済面で男性に頼ろうとして、相手が暴力を振るう人だったとかの場合もある。
- 宇治市の相談に関わってもらっている市外の弁護士やカウンセラーからは、宇治の人はぎりぎりまで我慢して一人で抱える傾向がある。もっと早く相談に来ればよかったのと思うケースが多いと言われる。
- 生活保護家庭で育った若い相談者からは、親に「働かなくても生活保護もらって生活したらいい」と言われるという話も聞く。親のそういった意識を反映して、短時間でラクに稼ごうとするが、仕事をしていても続かないことも多く、貧困の連鎖を生んでいる。
- 個人的には、大人を信頼していない若い人たちへの支援が必要だと思う。10代で子どもを連れて、パートナーから逃げたいという相談者をシェルターにつないだがシェルターの生活が窮屈で、結局パートナーのところに帰って、また出てきたりしている。
- DV家庭に育つなどすると大人同士の良い関係のイメージが乏しいように思う。
- 離婚するとき、生活保護を受ける前提で、先の見通しなく簡単に離婚する。貧困の連鎖で離婚しても親に頼れない。「まずは仕事を探して」と促しても、自分の条件をかたくなに固持して受け入れない。経済的自立を促すために、就労支援を行うが、生活保護から抜けたくないのが本音ではないかと思う程意欲が低い。
- 生保を受けている人の家に行くと、「ゴミ屋敷」状態であることが多い。生活そのものをちゃんと送れない人が多い。
- 日常安心・安全感のある生活が送れていないために整理整頓ができないことが多い。
- 専業主婦の相談者で「自分は何もできない」と言う人に、「結婚する前はデパートで働いていた」と言うので、「接客経験があるのなら何でもできる」と励ましたら、後日、本人から「あのときに言われことが自信になって仕事に就くことができた」と聞かされ

た。相談者には自己評価が低い人が多い。

(2) 「新型コロナウイルスに関連する状況」について

- 公的機関の相談時間が終わった後の時間帯（17時～23時）に（民間シェルターに）相談の電話がかかってくる。4月以降100件以上の相談があった。
- 家庭内別居状態で、夫が生活費を家に入れない人から、特別給付金の10万円を自分のものとして受け取りたいという相談があった。制度上、同一世帯であれば世帯主の口座に振り込まれるのは変えられない。それでも、あきらめずに夫に伝えるようアドバイスしたが、夫から「渡さない」と言われたという。
- コロナの自粛で、夫がそれまでやっていた気晴らし（パチンコなど）ができなくなってストレスが高まり、DVが増えたという相談があった。
- すでにDV被害のある人から、特別給付金10万円のことで、新たに夫と衝突したと聞いた。
- 個人に給付される特別給付金は、自己認識が変わるきっかけになったと思う。10万円は自分が受け取る権利があるものだ。そのような自己認識の変化が起こるのは良いことだ。
- 臨時相談は30件以上あった。コロナのせいで突然DVが増えるのではなく、今まで隠れていたり、諦めていたことが表面化したと思う。
- 事実婚でパートナーと離れたいという相談者の話を聞くと、親から虐待を受けて育ち、家を出て自分が働いたお金を親に搾取されていた。親に居場所が分からないよう住民票は実家のままにしているので、給付金は親が受け取って喜んでいるだろうと話すので、親族間の暴力にあたるから申し出れば給付金を受け取れることをアドバイスした。虐待する相手と関わりを持つことがしんどいから、諦めるのが早い。諦めるのが早いというのは自己肯定感の低さも示している。

(3) 「地域にあると良いものやこと、地域に不足していること」

- 民間の立場からは、行政に希望することは多い。まず、コロナで公民館が利用できずに困った。自前のシェルターは狭いので、広い空間で何かを行いたいときに利用していたのが利用できなくなった。教育関係者に研修してほしい。
- 宇治市には「ふれあい教室」（不登校の居場所）があるが、子ども同伴でシェルターに来た人の子どもを「ふれあい教室」に行かせたいが、状況調査が必要と言われて時間がかかって間に合わない。すぐに入れるような便宜を図ってほしい。
- 宇治市の良いところは、DV連携会議があること。女性のエンパワメント支援の連携会議があると良いと思う。民間機関も含めた会議構成にして、我々民間が知らないことを教えてほしい。
- 市の生活保護のCW（ケースワーカー）は1人が80～90世帯を担当する。5、6パターンに類型化されるが個別の状況は、みんな違う。家庭ごとのテーマに応じて支援するが、CWにすべての専門知識があるわけではないので、問題を解決するためのつなぐ先を知らないと具体的な支援にならない。個別メニューの細かな具体的なことを知ることでできるものがあると良い。

- 市役所に来た相談者に必要とする支援を受けてもらうために、男女共同参画支援センターに相談に行くよう勧めることがあるが、行かない人が多い。
- 相談者を別の機関につなぐときには、本人は同じことをまた言わないといけない。機関内・外、また行政と民間同士で当事者の情報を書面で共有できると文章の形で残せるため、当事者がしんどい思いをすることをなるべく避けられ、当事者の訴えを尊重することになるのだと思う。分かってくれる人が相談を聞くのと、そうでないのでは違う。
- 本人が男女共同参画支援センターに来なくても、市役所から言われたらセンターの相談員が出向いて一緒に話を聞くことはできる。
- 行政のたらいまわしが少しでも減れば当事者は助かる。

(4) 「支援者の立場で感じる課題」について

- 若い世代では自立と自由をはき違えている人が多いと感じる。団塊ジュニア世代は、親から何でも与えられて、自分の言うことが何でも通るような育ち方をしている傾向がある。
- 市のCWの資質を高い水準で平準化することが必要。行政内部のつながりはしやすいが、民間の情報を知っていると、支援の幅が広がる。
- 若い女性が妊娠したときに、「中絶＝悪いこと」と思い込んでいて、産んだ後の見通しなく、「産みたい」と言う。望まない妊娠をしたときの選択肢をきちんと教育する必要があると思う。
- 子どもを育てることに対する責任感が弱いにもかかわらず、妊娠したら産まないといけないと思い込んでいる傾向がある。
- そもそも「性的同意」についての認識が低い。
- 自分が中学高校時代を過ごしたカナダでは、赤ちゃんを産んだらどうなるかという体験学習で、赤ちゃんの体重と同じ重さの小麦粉の袋を抱えた状態で何日か過ごしたり、夜も30分おきに起きてミルクをあげるという経験をした。
- 若くて妊娠する子は、学校に行けていなくて学力が低いことが多い。基礎的な学力をつける教育が必要ではないか。
- 民間シェルターの活動資金が不足している。府から受けている補助金は、シェルターの家賃にも足りない。せめてスタッフが生活できる位の経済的支援があってほしい。

4. 地域防災における男女共同参画

(1) 「自主防災活動について」

- 平尾台では、最初に老人クラブを数名でつくったことから自主防災組織につながっている。活断層に囲まれた平尾台では、南海トラフ地震が来たら被害が大きくなる可能性が高いことが、防災に取り組むきっかけ。災害時には「自助」「共助」「公助」の流れになるが、おそらく市からの支援は震度 7 だったら 3 日から 1 週間は来ないと予想している。その間どうやって自分たちでしのぐかが当初の問題意識である。
- 自主防災で大事なこととして、「あさぎりプラン」には地域コミュニティのことが書かれていない。地域の消防団に話を聞きに行ったときの印象として、田舎の消防団はみんな地域を守るという意識がある。
- 自分たちの地域は自分たちで守るという考えから、約 15 年前から老人クラブと自主防災組織をつくろうと地域で提案してきた。
- ニュータウンの平尾台は、30 年前に 40 歳くらいで入居した人がいま 60～70 歳代になっている。いまの 70 歳代は、時間も体力もあるので地域の活動を担える。
- 当初「安否確認だけしたい」と協力を要請し、自治会の専門部会として継続的に活動できるように位置づけた。最初は、自主防災に対する住民意識も低く、何をするか半信半疑。「黄色いタオル」と備蓄品の購入から始めて、防災冊子の印刷、防災訓練と活動を広げていき、さらに備蓄品を充実するために、民間企業の助成金も活用した。
- 次に BCP (事業継続計画) として、助成金を活用して「災害に強い情報システム構築」に取り組んでいる。自分が会長の間に、必要なものを整備すれば次の人が困らないと考えた。
- 活動の根幹は地域のコミュニティ。当初 70 代のメンバーで始めた活動も今は 30 代、40 代が参加する。市の助成金で行う防犯カメラ設置は、女性・子どもや高齢者の犯罪抑止になると考えている。
- 活動するうえで、地域の人には「ボランティアなので一生懸命しないこと」と伝えている。そのかわり、地域で決まったことは冊子にして全員に情報共有している。
- 防災マップは、コロナの影響で当初の予定を変更して、PTAの母親が一人ひとり地域を回って記入した情報を集約した。PTAの人が一生懸命に地域を回ってくれた背景には、これまでに、地域の子どもたちが喜ぶことをと、夏祭りに自主防災会の人が積極的に協力してきたことがある、子ども世代、親世代、シニア世代の三世代の交流に努めている。
- 喜老会では、子どもの見守り隊をやろうと呼び掛けて、通学路に立ったり、御蔵山まつりに協力している。率先して動くから、みんなも力を貸してくれる。これまでの活動を通じて、地域住民とPTAの保護者との信頼関係ができています。
- 最近、災害時の性暴力被害の対応が必要だと知って、今後は、人権が守られるよう災害時の性暴力被害を抑止するためのことをしたい。ホイッスルを備蓄品に含めるなど。助成金を活用する理由は、助成金で購入したものなら自治会以外の人にも使ってもらえるから。
- 避難所用の間仕切り、トイレの凝固剤、プライバシーを保護するテントは授乳や着替

えに使える。男女共同参画支援センターで洗濯物干し場も困ると聞いた。地域の団体とも協力してもっと良くしたい。

- 避難所の女性リーダーは、いろんなことに取り組む中で地域の人とのつながりができて、候補者は頭にある。
- 消防団活動については、男性の消防団は、市制施行と同時に50年前に発足。あさぎり分団は平成10年に発足した。全国的に女性が消防団に参加するのは増えているが、女性だけの分団は京都府初。私が参加したきっかけは、PTA会長をしていた平成7年に阪神淡路大震災があり、自分にも何かできないかと思ったことがきっかけ。当初は、女性だけの消防団がどんな活動をしたらよいかわからなくて、イベントの手伝いや阪神淡路大震災のビデオ上映会くらいしかしていなかった。
- メンバーからも、もっといろんな活動がしたいという声が多かったので、AEDや応急手当の研修を受けて資格をとったりした。当初は「あさぎり」に資格を取らせて何をやるの、という声も聞かれたが、今では年間約60回の講習会で指導している。この3、4年は中学校で命の大切さの授業を行っている。
- メンバーには、常々「初心を忘れないでいよう」と伝えて、専門用語ではなく、市民にわかりやすい言葉で伝える。男性に比べて力の弱い女性でもできる応急処置のコツをわかりやすく指導するようにしている。女性が教える機会も必要だと思う。小さな子どもにも自分の身を守る方法を伝えたいと思って、幼児向けの「パネルシアター」を作って、保育所や夏祭りで子どもたちに見せている。
- 活動の3本柱は、救命救急講習（年60回）、パネルシアター、防災訓練の手伝いである。地域の人役に立っている手ごたえとやりがい喜びになっている。
山間部の笠取地区は、地域に男性が少ないので、ポンプ訓練もやっている。コミュニティのつながりが強いので高齢者の訪問もしている。災害時に車いすの人や高齢者を支援する方法の研修も受けている。自分たちでやりたいと思ったことを実践している。
- 我々も、日赤の救命救急講習を受け、助成金でAEDの機械も申請した。高齢者を救助する講習も受けた。また、地震が起きたときには、自分たちの家の周りがどうなるのかをシミュレーションした動画を作成して大画面で見てもらおう出前講座をしたところ、非常に関心が高く、他の地区からも見たいという希望があったので、出前講座に行く先の各地区に合わせた動画を作成した。
- 災害時は誰もが臨機応変に動けるようにしておいた方がよい。顔見知りなら、災害時も助け合える。医療関係者、警察、消防署との連携もつくっている。地域の消防団にもっと積極的に動いてほしいので、地域の若い人を消防団に入ってもらおうようにした。
- 消防団と地域とのかかわり方は地域によって異なる。かかわりが深い地域もある。男性の消防団は地域ごとに活動しているが、あさぎり分団は呼ばれたらどこの地域でも行く。小学校の防災訓練では、地域の男性消防団とあさぎり分団の両方が呼ばれることも多い。地藏盆のときに呼んでくれる地域もある。
- 宇治市には「地域防災を考える会」があって、自主防災組織は4~5か所ある。あさぎり分団にぜひ来てもらいたい。

(2)「防災活動や避難所運営に女性の視点を反映すること」について

- 災害時の性暴力被害の話聞いて、そんなことは知らない人ばかりなので、町内会で話をしてもらって、みんなの意識改革をしたい。市役所から職員が来て出前講座で話をしてほしい。例えば年に1回、危機管理課と男女共同参画課がタイアップしてきてもらえるとよい。みんなが知ることで抑止力にもなる。
- 消防団の活動は「防火・防災」に尽きるが、自分の身を守るという「減災」の視点も必要だと思う。メンバーにも「自分の命を自分で守らないと、人を助けられない」と言っている。
- HUG（避難所運営ゲーム）研修も最初は右往左往する。あらかじめ訓練しておくから実際に避難所を開設するとなったときに落ち着いて対応できる。そうでないと、みんなが自己主張してもめごとが起きる。避難所には女性リーダーが必要で、避難所の運営は行政主導ではなく、避難している当事者が運営できるようにしておくのが良い。
- 宇治市は災害が少ないから他人事のような感覚の人は多い。
- 宇治市では年3回防災リーダーの研修がある。防災リーダーの女性割合を知りたい。防災リーダーの研修では、避難所開設運営などの実践的なことが必要だ。そのうえで自分たちでマニュアルを作ればよい。

(3) 「地域の活動における女性の参画」について

- あさぎり分団に新しい人を入れたいが、今の若い世代は働いている人が多いので、入ってもらえる若い人がいない。高齢化している。地域の活動を担うのは女性が多いが、トップは男性の方がうまくいくという意識があると思う。
- 消防団の活動を知らない人が多いのでPRが必要と感じている。
- 防災訓練のときに、各団体がブースを出してパネル展示やPRをすると良い。
- 30歳代のPTAの母親の発案で、夏休みに集会場を使って、子どもが集まれる「こどもサロン」を開設して自分たちが交代で子どもをみる、と言う。良いアイデアなので我々がバックアップして「こどもサロン」の開始を予定していたが、コロナの影響で中止になった。ぜひ実現できるようにしたい。その母親からは「相談できる人がいるから良かった」と言ってもらった。何より子どもが喜ぶことがうれしい。自分たちだけでやろうとせず、社協や行政にもかかわってもらえば地域に受け入れられやすいとアドバイスした。

5. 男性のワーク・ライフ・バランス（子育てへの参画を中心に）

(1) 「男性の子育て」について

- どんなに父親が頑張っても母親からみると足りない。平日昼間の学校行事に参加するのは難しい。
- 保育所の送り迎えを父親がしている家庭は全体から見れば少数だが、徐々に増えつつある。父親と母親が交互に送迎する家庭もある。全体的には母親や祖父母に協力してもらっているケースが多いイメージがある。
- 保育園行事の参加は、父親を含めた家族で参加する家庭が増えた。自分が子どもの頃と比べると男性の子育て参加は増えていると感じる。

- 就学前の自分の子どもを連れて、土日に公園に行くと、父親が子どもを連れて来ているのは多い。自分の子どもの時に比べると子育てに積極的に参加している父親が多い印象だ。
- 市役所のようにノー残業デーを週に何日か設けて早く帰って食事を一緒にできたら良いが、いまは夕食をともにするのは週に1、2回。
- 学校の懇談は、自分は仕事を抜けられないので、妻には、先生に聞いてきてほしいことをメモして渡す。子どもへの関わり方に母親と父親で差が出ないように気をつけている。
- 子どもが学校で何組かを覚えていないと子どもへの関心が低いと思われる。
- 家事では、自分が家で料理を作るよりも、外食に連れて行くほうが妻から喜ばれる。たまに自分が料理をすると、「後片付けは誰がやるの？食器を洗って直すところまでが料理」と妻から言われる。
- 夕食をつくる時間には仕事から帰宅できないので、食後の洗い物を頼まれるとやる。
- 「やってあげる」「手伝う」は、妻からすると主体的でないと思われると本で読んだ。
- 中学生の子どもが塾に行く前に夕食を食べさせるので、自分はその時間には帰られない。結婚した時から共働きなので家事は分担することになっている。食事を作れないかわりに食後の洗い物はする。自分が風呂に入るのが最後なので、入った後洗濯をして干すまでやる。ちょっとでも家事をやろうとする姿勢を見せてくれるとうれしい、と保育所の保護者から聞いた。態度で示すことが大事と思う。
- 結婚したころは、妻は専業主婦で自分は何もしなかった。上の子どもはオムツを替えたこともない。下の子どもが生まれて、まだ上の子どもにも手がかかるので、自分も手伝わないといけなかった。僕の要領が悪いのか、家事は下手に手伝うより、食器洗いなら食洗機を買った方が良いと言われた。洗濯物を自分が干すと、帰ったら、(妻が干し直して)干し方が変わっていて、自分が下手にやらない方が良いと思った。妻の家事のやり方を乱さない方がいいのかなど。
- 保育士という仕事柄、子どものオムツは、自分も替える。妻も自分もめんどくさがりなので、家事を減らす道具は買っている。
- 父親と一緒に遊んでくれるのは小さいときだけと思うので、土日は一日子どもと一緒に過ごしている。オムツ替えもお風呂も全部やる。自分自身、楽しく今はできている。用事を出かける以外は土日の両方とも子どもと過ごす。自分の子どもができるまでは、子どもは嫌いだったし、自分がオムツを替えることなど考えもしなかった。子どもができて、それをやっている自分に驚いているくらいだ。
- 保育所の保護者は、共働きでも父親以外の送迎が多いが、父親も増えている。ほぼ毎日父親が送ってくる家庭は、厳密な数字ではないが、以前は全体の10%以下だったが今は20%くらい。父親の家事を妻が誉めることは少ないが、「土日はパパが子どもを遊びに連れて行ってくれる」「子どものことをちゃんと構ってくれる」という母親の声は聞く。それも育児参加なのかと思うようなことでも喜ばれる。
- 保育所の母親同士で、「家事をもっとやってくれたらいいのに。」と話される場面を目にすることがある。父親が家事を受け持つことも育児支援に繋がると感じる。

(2) 「子育てにまつわる悩みや困りごと」について

- 自分の出勤と一緒に子どもを連れてくるが、子どもが朝の準備に時間がかかる。早くしてほしいと思うが、子どものペースに合わせるのが困っている。
- 今困っているのは、中学生の子どもに持たせているスマホの対応。オンライン授業が始まってスマホのメーカーが容量を増やしてくれたのを、子どもは遊びに使っていると思う。
- 小さいうちは子どもと接する時間が長いので、子どもが困っていることが分かりやすい。中学生になると交友関係が広がり、スマホで連絡取り合うなど、子どもが何に困っているのかが分からなくなる。自分が中学生の時は父親と話をすることが少なかった。子どもとコミュニケーションをとる時間が必要だと思う。
- 小さい子どもでもスマホで YouTube を見ていると聞く。小学校に上がったならみんな見ているので、どう教えればよいか分からない。
- 一日何分までとか、時間を決めて見るとかルールを作ると良い。全然触らないと学校とかでみんなの話題についていけないとかあると思う。
- 3歳の子供が、YouTube をテレビで見て自然と覚えた。見始めると制限がきかずに見たがるときがあるので、「これを見たらおしまい」と約束して、子ども自身に電源のスイッチを切らせるようにしている。
- 女性は子育て中の悩みを、友人と愚痴を言い合うが、男性は妻に対する愚痴を職場で言ったりはしない。男性のガス抜きできるところがあったらなと思う。
- 保育所に来る父親同士で話したり、愚痴を言ったりしているようだ。男性保育士も自分と同じ立場で話しやすいようだ。
- 妻に対する不満はない。結婚して間がないからかもしれないが、自分ができないことをやってくれていると感謝している。
- 帰宅後に妻から子どものことで愚痴を聞かされることがある。本によると男性は解決方法を言いたくなるが、それを妻に言うと怒られる。30分ぐらい妻の愚痴を聞くのが苦痛を感じる。自分のことは飲み込む。僕らはどこに言えばいいのか。
- 妻からは「答えを求めているのではない。聞いてくれるだけでいい」と言われる。自分がこれだけ頑張っているというのを認めてくれるだけでいい。仕事終わりで疲れて帰ってくると、そういうところがどうしてもおざなりになってしまう
- 共感してほしいのだと思う。「うんうん」と聞いていたらいい。それをスマホ見ながら適当に聞いていると怒られる。

(3) 「男性がもっと子育てや家事にかかわるために必要なこと」

- 可能であれば、早く家に帰れること。
- 妻は男性の家事をもっと大きな気持ちで見てほしい。洗濯物も自分なりに考えて干しているのに、なぜわざわざ手間をかけて干し直すのかと思う。
- 妻から誉めてもらおうとやる気になる。やったのに怒られるとへこむ。
- 互いに認め合うことだと思う。「やって当然」と思うと、「なんでやらない」となる。ありがたの気持ちが大切。自分ができるときには、なるべくやるようにしている。
- 今気づいたが、感謝の気持ちを言葉に出すことは、あまりしていない。

- 普段は 19 時頃帰宅して、夕食を一緒に食べて、子どもを風呂に入れて、歯磨きして 21 時に寝かしつけるまでやっている。今の職場は、自分で時間調整できるので、時間内で仕事を終わらせるようにしている。以前は自分で時間を調整できない部署もあった。
- 「これはパパの方が上手だからパパにしてもらおう」と妻が言うと、その気になる。運動クラブの練習で子どもが筋肉痛になっているからマッサージしてあげて、と頼まれると、喜んでやっている。子どもとのコミュニケーションの時間にもなる。妻がうまく声かけしてくれていると思う。

(4) 「男性が子育てにかかわることのメリット」

- 日頃から子育てにかかわっていると子どものことがよく分かる。子どもの様子を把握できる。接点がなくなると分からない。コミュニケーションが大事だと思う。子どもの様子が分かると何か困ったことが起きたときに備えることができる。家事を手伝うと妻の苦勞が分かる。感謝することが増える。当たり前と思われるとやる気をなくするのはお互い様で、一緒にやることでお互いの苦勞が分かる。
- 自分がやっていたスポーツに子どもが興味をもって共通の話題ができた。子どものやりたいことが自分の知らないことだと会話ができない。共通の趣味があると親が楽しんでる姿を見せられる。
- 1 人目の子どもときは、夜泣きをすると自分が起きて寝かしつけたが、2 人目は夜泣きに気づかず寝ていたら、妻が抱っこしないと寝ないようになった。かかわることで子育てを手伝える。普段から関わらないと、いざという時に手伝えないと気づいた。
- 上は男の子なので、自分が子どものときに楽しかったことを思い出して、少し荒っぽいことも一緒に遊んであげられるのは父親ならではのと思う。
- 働き方の考えが変わった。以前は長い時間働くことが良いという価値観だったが、今は効率よく合理的に最大限の仕事ができるかを考えてするようになった。
- 子どもの成長を見ると、こんな自分でも親になれるんだと実感する。自分の成長も感じることができる。
- 子どもが大きくなっても子どもの成長を実感する。子どもに負けるはずがないと思っていたゲームが子どもに勝てなくなった。
- 父子家庭になった友人は 180 度生活が変わったと言う。仕事を早く切り上げて、子どものお弁当を作っている。凝ったお弁当の写メを送ってきたりして、大変なだけでなく楽しんでいる様子もうかがえる。妻がいた時から子育て関わっていたら良かったと言っている。